



日汉对照
全译本

陰獸
阴兽

[日] 江戸川乱歩 著 林少华 注译



中国学术出版社

日汉对照
全译本

陰獸 阴兽

[日] 江戸川乱歩 著 林少华 注译



中国宇航出版社

·北京·

版权所有 侵权必究

图书在版编目(CIP)数据

阴兽：日汉对照全译本 / (日) 江戸川乱步著；林少华注译. — 北京：中国宇航出版社，2013.6

(世界文学经典珍藏馆)

ISBN 978-7-5159-0418-4

I. ①阴… II. ①江… ②林… III. ①日语—汉语—对照读物②推理小说—小说集—日本—现代 IV.

①H369.4:I

中国版本图书馆CIP数据核字(2013)第099164号

策划编辑 于 慧

封面设计 文道思

责任编辑 刘 莹 刘东雪

责任校对 满新茹

出版 中国宇航出版社

社址 北京市阜成路8号 邮编 100830

(010)68768548

网址 www.caphbook.com

经销 新华书店

发行部 (010)68371900 (010)88530478(传真)

(010)68768541 (010)68767294(传真)

零售店 读者服务部 北京宇航文苑

(010)68371105 (010)62529336

承印 北京中科印刷有限公司

版次 2013年6月第1版 2013年6月第1次印刷

规格 880×1230 开本 1/32

印张 7.5 字数 181千字

书号 ISBN 978-7-5159-0418-4

定价 22.80元

本书如有印装质量问题，可与发行部联系调换

江户川乱步和他的作品

(译序)

林少华

教学之余，翻译了七十几本书。村上春树作品四十一本，其余也几乎都是所谓纯文学作品。推理小说仅此一本。这是因为，我觉得文学关乎灵魂和审美，还是纯粹一些好。仅以这套“世界文学经典珍藏馆”来说，《哥儿》妙趣横生，《心》一唱三叹，《罗生门》入木三分，无不具有明确的艺术追求和灵魂拷问力度，同时给人以文学特有的审美感受。《蟹工船》虽然坚定指向社会批判，属于不折不扣的无产阶级文学作品，但并不流于空洞的政治说教，至少文体别具特色，鲜活生动，掷地有声。

相比之下，推理小说则意在推理。而一旦推理，势必条分缕析，刨根问底，减弱文学之所以为文学的本质特征或其纯度。何况推理小说大多与命案有关，阴风阵阵，黑幕重重，步步惊心，不符合我的文学口味。话虽这么说，到底翻译了《阴兽》这本推理小说。直接原因自然是出版社的约稿。而更重要的原因是其文体或语言引起了自己的兴趣——尽管小说本身不属于纯文学作品，但文体中的纯文学性因素所在皆是。试举一例：

她脸色青白。但那般恰到好处青白我还从未见过。倘若世上真有美人鱼存在，一定有着她这样美艳艳的肌肤。总的说来，她长着一张古典式的瓜子脸，眉毛、鼻子、嘴、脖颈、肩，所有线条都那般优美纤柔，轻盈袅娜，给人的感觉就好像古代小说家经常形容的那样“一触即失”。至今我仍不能忘记当时她那长睫毛下如梦如幻的眼神。……尤其笑时那含娇带羞的柔弱无力之感，使我产生一种别样的激动。

不难看出，这样的描写比之任何纯文学作品都未必相形见绌。笔调腾挪有致，疾驰相宜，富于文采和浪漫气息，形象呼之欲出，足以引发读者的文学想象和好奇心。通观全书，整体行文也相当考究。欲擒故纵，摇曳生姿，表现出作者非同一般的语言功力和文学修养。而这正是对译经典文本必不可少的要素。

此外，作为江戸川乱步的代表作，《阴兽》固然构思巧妙，悬念迭起，推理丝丝入扣，舞台妖气弥漫，但不仅仅如此。其中还有深切的同情心和道义上的自我追问。例如主人公“我”在得知静子自杀之后，起始认定她的死等于证实了“我”的推理——她出于对犯罪本身的强烈兴趣和企图继承一大笔遗产随心所欲欢度后半生的目的杀害了自己的丈夫。但一个月过后，“我”开始怀疑静子杀害丈夫的真正动机，觉得为了自由和财产不足以使一个女人杀害多年朝夕相处的丈夫并在事情败露后投河自尽，而可能是由于她爱上了自己，是这点使静子沦为杀人犯并在受到恋人斥责后决心一死了之。于是我陷入深深的自责之中：

啊，对这个如此令人惶恐不安的疑虑我该如何是好呢？静子是他杀也罢，自杀也罢，反正都是我害死了那般倾心于我的可怜的女子。我不能不受我原本不多的道义之心的诅咒。难道世上还有比恋情更强劲更美好的东西吗？可我竟以道学家的冷酷将那般清纯美丽的恋情击得粉碎！

日本的推理小说，战前称之为侦探小说。战后日本减少汉字的使用数量，“侦”字未被列入“当用汉字表”，故改称推理小说。侦探（推理）小说十九世纪中期由美国作家爱·伦坡开其先河，十九世纪末二十世纪初由英国的柯南·道尔成其大端，而在二十世纪中期由同是英国作家的阿加莎·克里斯蒂推向高峰。日本在上世纪五十年代成为世界推理小说的重镇。据北京师范大学王向远教授统计，从战前的江户川乱步、横沟正史开始，经过战后的松本清张、森村诚一的拓展，再到八十年代赤川次郎的崛起，六十年间涌现五十多位有成就的推理小说家，作品逾五千部之多（参见《王向远著作集·日本文学汉译史》）。

江户川乱步（1894—1965），日本三重县人，本名平井太郎，因仰慕推理小说“始祖”爱·伦坡而取笔名江户川乱步（日语中“乱步”与“伦坡”发音相近）。在早稻田大学政经学部就读期间即对英美推理小说产生浓厚兴趣。毕业后做过贸易公司职员、旧书商、报社记者等十几种职业。二十年代开始创作推理小说。处女作《两分硬币》和继之发表的《心理试验》，以暗号和精神分析手法破解作案图谋，显示出日本推理小说的创作前景。其后陆续发表了《阁楼散步者》《人椅》《红房间》《火星上的运河》，或想落天外，或触目惊心，或扑朔迷离，俱为佳作。继短篇之后，以《全景岛奇谭》开拓长篇领域，凸显侦探趣味。《同贴花旅行的男人》《虫》集中发掘梦幻和异常心

理，《蜘蛛男》《黄金假面》等长篇波谲云诡，险象环生，极富刺激性，广受大众欢迎。战后在致力于推理小说评论和培育后起之秀的同时，推出了《化人幻戏》和《十字路口》等作品。

《阴兽》创作于一九二八年，是最具江户川乱步创作特质的中篇，故选入这套丛书之中。翻译旨在达意传神，注释力求简明扼要。岂敢垂范来昆，但期抛砖引玉，如此而已。

最后我想说的是，此书二〇〇八年出了平装本，转眼五年过去。今天您手中的精装本无论译注内容还是版式设计都较平装本有了明显改进。尤其译注方面，责任编辑刘东雪的一丝不苟使之避免了不少疏漏或欠妥之处，在此谨致诚挚的谢意。如果说一本书是一只小船，那么出版社就是一座码头。现在，小船终于离开码头扬帆起航了。但愿这只小船带给您一丝惊喜、一分收获。

2013年3月24日于窥海斋

时青岛迎春花开玉兰初绽



目 录

阴 兽……	155
陰 獸……	1



陰 獣



わたしはときどき思うことがある。

探偵小説家というものには二種類あって、一つのほうは犯罪者型とでもいうか、犯罪ばかりに興味をもち、たとい推理的な探偵小説を書くにしても、犯人の残酷な心理を思うさま描かないでは満足しないような作家であるし、もう一つのほうは探偵型とでもいうか、ごく健全で、理知的な探偵の経路にのみ興味をもち、犯罪者の心理などにはいっこう^①とんちゃくしない作家であると。

そして、わたしがこれから書こうとする探偵作家大江春泥は前者に属し、わたし自身はおそらく後者に属するのだ。

したがって、わたしは、犯罪を取り扱う商売にもかかわらず、ただ探偵の科学的な推理がおもしろいので、いささかも悪人ではない。いや、おそらく、わたしほど道徳的に敏感な人間は少ないと言ってもいいだろう。

そのお人よしで善人なわたしが、偶然にもこの事件に関係

① いっこう：（副）或いっこうに、（后接否定式）一点也，全然，完全，根本。下文のいささかも亦同。

したというのが、そもそも^①だいじ大事の間違いであった。もし、わたしが道徳的にもう少し鈍感^{どんかん}であったならば、わたしにいくらかでも悪人の素質^{そしつ}があったならば、わたしはこうまで後悔しなくても済んだであろう。こんな恐ろしい疑惑^{おそぎわく}のふちに沈まなくても済んだであろう。いや、それどころか^②、わたしはひょっとしたら、今ごろは美しい女房^{にようぼう}と身に余る財産^{ざいさん}に恵まれて^③、ホクホク^④もので暮らしていたかもしれないのだ。

事件は終わってから、だいぶ月日がたったので、あの恐ろしい疑惑はいまだに^と解けないけれど、わたしは生々しい現実^とを遠ざかって、いくらか回顧^{かいこてき}的になっている。それでこんな記録^{きろく}めいた^⑤ものを書いてみる気になったのだが、そして、これを小説にしたら、なかなかおもしろい小説になるだろうと思うのだが、しかし、わたしは終わりまで書くことは書いたとしても、ただちに発表する勇氣はない。なぜといって、この記録の重要な部分をなすところの小山田^{おやまだ}氏^し変死事件はまだまだ世人^{きおく}の記憶に残っているのだから、どんなに変名^{へんめい}を用い、潤色^{じゅんしよく}を加えてみたところで^⑥、だれも単なる空想小説とは受け取ってくれないだろう。

① そもそも：[抑]（接續・副）说起来，本来，原本；从一开始，最初，起始。

② どころか：（副助）岂止，何啻，非但，慢说，哪里谈得上。

③ 恵まれて：[恵まれる]，受惠于，幸有，富有，在……方面得天独厚。

④ ほくほく：（副・サ变自）兴高采烈，喜笑颜开，喜不自胜，乐不可支。～もの，满心欢喜。

⑤ 記録めいた：めく（接尾）带有……意味，像……样子，不无……倾向。

⑥ ところで：动词过去式＋ところで，哪怕，就算，即便，即使，纵使，纵令。

したがって、広い世間にはこの小説によって迷惑を受ける人もないとはかぎらない^①し、また、わたし自身、それがわかっては、恥^はずかしくもあり、不快^{ふかい}でもある。というよりは、本当を言うと、わたしは恐^{おそ}ろしいのだ。事件そのものが、白昼^{はくちゅう}の夢のように、正体^{しょうたい}^②をつかめぬ、変^へに無気味^{ぶきみ}なことがらであったばかりでなく、それについてわたしの描^{もう}いた妄想^{もうそう}が、自分でも不快を感じるような恐^{おそ}ろしいものであったからだ。

わたしは今でも、それを考えると、青空^{あおぞら}が夕立雲^{ゆうだちぐも}でいっぱいになって、耳の底でドロンドロンと太鼓^{たいこ}の音^{おと}みたいなものが鳴りだす。そんなふう^{へん}に目の前が暗くなり、この世が変^{へん}なものに思われてくるのだ。

そんなわけで、わたしはこの記録^{きろく}を今すぐ発表する気はないけれど、いつかは一度、これをもとにして、わたしの専門^{たんていしやうせつ}の探偵小説^{たんていしやうせつ}を書いてみたいと思っている。これはいわばそのノートに過ぎないのだ。やや詳^{こころおぼ}しい心覚え^{こころおぼ}^③に過ぎないのだ。わたしは、だから、これを正月のところだけであとは余白^{よはく}になっている古い日記帳^{にっきちょう}へ、長々しい日記でもつける気持ちで、書きつけていくのである。

わたしは事件の記述に先^{さき}だつて^④、この事件の主人公である探偵作家大江春泥^{たんていさつ か おお え しゅんでい}の人となりについて、作風^{さくふう}について、

① とはかぎらない：～とは限らない，未必，不一定，也可能不……

② 正体：本来面目，真面目，真相；神态。

③ 心覚え：备忘录，记录，笔记；记住，记忆。

④ 先だつて：さきだつ〔先立つ〕，领先，首先，先于。

また、かれの一種^{いよう}異様な生活について、詳しく説明しておくのが便利であるとは思うのだけれど、実はわたしは、この事件が起こるまでは、書いたものではかれを知っていたし、雑誌^{ぎろん}の上で議論^{ぎろん}さえしたことがあるのだけれど、個人的^{こうさい}の交際もなく、かれの生活もよくは知らなかった。それをやや^①詳しく知ったのは、事件が起こってから、わたしの友だち^{ほん}の本^だ田という男を通じてであったから、春泥のことは、わたしが本田に聞き合わせ、調べまわった事実を書くときにしるすこととして、できごとの順序にしたがって、わたしがこの変な事件に^ま巻き込まれるにいたった最初の^こきっかけから筆を起こしていくのが、最も^{しぜん}自然であるように思う。

それは昨年^{さくねん}の秋、十月なかば^②のことであった。

わたしは古い仏像^{ぶつぞう}が見たくなって、上野^{ていしつはくぶつかん}の帝室博物館の、薄暗くガラんと^③したへやべやを、足音^{しの}を忍ばせて歩きまわっていた。部屋が広くて人けがないので、ちょっとした物音がこわいような反響^{はんきやう}をおこすので、足音ばかりではなく、せきばらいさえはばかりられる^④ような気持ちだった。

博物館というものが、どうしてこうも不人気であるかと疑われるほど、そこには人の影がなかった。陳列^{ちんれつ}棚^{たな}の大きなガ

① やや：[稍・漸]（副）稍微，有点儿，多少，不久，一会儿。

② なかば：[半ば]，半，一半，中间，中央，当中；（副）大致，大体，基本上。

③ ガラんと：がらんと（副）空旷，空空荡荡，空空如也；（声音大）咣啷，哐当。

④ はばかりられる：はばかり[憚る]，忌憚，顾忌；传播，吃香。

ラスが冷たく光り、リノリウムには小さなほこりさえ落ちていなかった。お寺のお堂みたいに天井の^{たてもの}高い建物は、まるで水の底にでもあるように、^{しんかん}森閑と静まり返っていた。

ちょうどわたしが、ある部屋の陳列棚の前に立って、古めかしい^{き ぼ}木彫りの^{ぼ さつぞう}菩薩像の、夢のようなエロチックに見入っていたとき、うしろに、忍ばせた足音と、かすかな^{きぬ}絹ずれの音がして、だれかがわたしのほうへ近づいてくるのが感じられた。

わたしはなにかしらゾツと^①して、前のガラスに映る人の姿を見た。そこには、今の菩薩像と影を重ねて、^{きはちじょう}黄八丈のような柄のあわせを着た、品のいいまるまげ姿の女が立っていた。女はやがてわたしの横に肩を並べて立ち止まり、わたしの見ていた同じ^{そそ}仏像にじっと目を注ぐのであった。

わたしは、あさましいことだけれど、^{ぶつぞう}仏像を見ているような顔をして、ときどきチラチラと女のほうへ^め目をやらないではいられなかった^②。それほどその女はわたしの心をひいたのだ。

彼女は^{あおしろ}青白い顔をしていたが、あんなに好ましい^{にん}青白さを、わたしはかつて見たことがなかった。この世にも^{ぎよ}人魚というものがあるならば、きっとあの女のような^{ゆうえん}優艶な^{そう い}膚を持っているに^{むかしふう}相違ない。どちらかといえば昔風のうりざね顔で、眉も、鼻も、口も、^{くびすじ}首筋も、肩も、ことごと

① ゾツと：（副・サ変自）心惊，怵然，毛骨悚然，不寒而栗。

② ではいられなかった：ないでいられない或ずにはいられない，不由得，禁不住，情不自禁，不由自主。

く①の線が優に弱弱しく、なよなよとしていて、よく昔の
小説家が形容したような、さわれば消えていくかと思われる
ふぜい②であった。わたしは今でも、あの時の彼女のまつげ
の長い、夢みるようなまなざしを忘れることはできない。

どちらかはじめ口をきったのか、わたしは今妙に思い出
せぬけれど、おそらくはわたしが何かのきっかけを作った
のであろう。彼女とわたしとは、そこに並んでいた陳列品
についてふた言み言口をきき合ったのが縁となつて、それ
から博物館を一巡して、そこを出て上野の山内を山下へ通
り抜けるまでの長いあいだ、道づれとなつて、ポツリポツ
リと③いろいろのことを話し合ったのである。

そうして話をしてみると、彼女の美しさは一段とふぜい
を増してくるのであった。中にも彼女が笑うときの、恥じ
らいがち④な弱弱しさには、わたしはなにか古めかしい油絵
の聖女の像でも見ているような、またあのモナ・リザの不思
議な微笑を思い起こすような、一種異様の感じにうたれな
いではいられなかった。彼女の糸切り歯はまっしろで大
きくて、笑うときには、くちびるの端がその糸切り歯に
かかって、なぞのような曲線を作るのだが、右のほおの青
白い皮膚の上の大きなほくろが、その曲線に照応して、なん

① ことごとく：〔悉・尽く〕（名・副）皆，尽，悉，全部，一律，统统。

② ふぜい：〔風情〕，様子，情形；风情，情趣，趣味。

③ ポツリポツリと：ぼつりぼつりと（副）东一句西一句；点点滴滴，一点一滴。

④ がち：（接尾）名词或动词连用形＋がち（な・に・だ），每每，往往，容易。

ともいえぬ優しくなつかしい表情^{ひょうじょう}になるのだった。

だが、もしわたしが彼女のうなじにある妙なものを発見^{はっけん}しなかったならば、彼女はただ上品で、優しく、弱弱しく、さわれば消えてしまいそうな美しい人という以上^{いじょう}に、あんなにも強くわたしの心をひかなかったのであろう。

彼女は巧みにえもんをつくらって、少しもわざとらしくなく、それを隠していたけれど、上野^{うえの}の山内を歩いているあいだに、わたしはチラと^①見てしまった。

彼女のうなじには、おそらく背中^{せなか}のほうまで深く、赤あざのようなみみずばれ^②ができていたのだ。それは生まれつきのあざのようにも見えたし、また、そうではなくて、最近できた傷^{きず}あとのようにも思われた。青白いなめらかな皮膚^{ひふ}の上に、かっこうのいいなよなよとしたうなじの上に、赤黒い毛糸^{いと}をはわせたように見えるそのみみずばれが、その残酷^{ざんこく}み^③が、不思議にもエロチックな感じを与えた。それを見ると、今まで夢のように思われた彼女の美しさが、にわかに生々しい現実^{げんじつ}みを伴^{ともな}って、わたしに迫^{せま}ってくるのであった。

話しているあいだに、彼女は合資会社碌々^{ろくろくしょうかい}商會の出資社員^{じつぎょうか おやまだろくろうし おやまだしずこ}のひとりである実業家^{じつぎょうか}小山田六郎氏の夫人^{おやまだしずこ}小山田静子であったことがわかってきたが、さいわいなことには、彼女

① チラと：ちらと、或ちらつと、ちらりと（副）一闪、一晃儿、一下子、一瞥；偶尔，偶然。

② みみずばれ：（皮肤上出现的）红道子。

③ 残酷み：残忍程度。形容动词＋み（さ），表示程度，作名词使用。